

議 事 録

会議の名称	第3回三田市総合計画審議会第2部会
開催の日時	令和3年7月20日(火) 18時30分～21時25分
開催の場所	三田市役所 本庁舎3階302会議室
出席した委員の氏名	田邊部会長、足立副部会長、奈良委員、下中委員、里中委員、的場委員、馬場(路子)委員、大坂委員、川邊委員、佐藤委員、高崎委員
欠席した委員の氏名	なし
出席した庶務職員の職及び氏名	田中市長公室長、太田政策課長、山谷総合計画策定担当課長、靱井政策課係長、志水政策課事務職員 【所管課等】 横溝子ども未来室長、西垣戸子育て応援室長、外岡学校教育部次長、杉山すくすく子育て課長、上島子ども家庭課長、寛長健やか育成課長、井上放課後児童クラブ担当課長、井上保育振興課長、松本幼児教育振興課長、久後幼児教育振興課参事、浅野教育総務課長、上野学校再編担当課長、山本学校教育課長、山口教育支援課長、小山教育研修所長、廣瀬学校給食課長
傍聴者の人数	4名
議 題	1 乳幼児期の育ち 2 子ども・子育ての安心 3 地域ぐるみの子育て 4 学校教育の充実
会議の概要(結論)	・「乳幼児期の育ち」、「子ども・子育ての安心」、「地域ぐるみの子育て」、「学校教育の充実」について意見交換を行った。
公開・非公開の区分	公開
使用した資料	次第 資料12 第5次総合計画基本計画素案作成シート 「乳幼児期の育ち」、「子ども・子育ての安心」、「地域ぐるみの子育て」、「学校教育の充実」
連絡先	市長公室政策課 電話(079)559-5038 内線(2211)

1 開会

＜志水政策課事務職員の司会により開会、配布資料の確認等＞

2 議事

(1) 乳幼児期の育ち(子ども・未来部子育て応援室)

＜西垣戸子育て応援室長から資料に基づき説明＞

＜意見交換＞

委員：幼稚園教諭や保育士の離職率の低下の話も出ていたが、園によって労働環境が異なると思う。

公立園には市からの指導ができると思うが、私立については、市はどのように関わるのか。

事務局：私立幼稚園に対して、市が直接的に指導を行うことは難しい。ただ、私立幼稚園のネットワークがあり、それを通じて、課題について議論できる環境はある。

副部会長：認定こども園になってから、事業者選定を行う際には労働環境についても審査項目となっており、厳しくはなっている。社会保険労務士が労働環境についてチェックする制度もできている。

委員：三田市の幼稚園では、園庭緑化がなされているが、その管理は先生とPTAが担っている。地域を巻き込んだ取り組みはしないのか。

事務局：市立幼稚園の園庭の管理は、保護者の方にもお世話になりながら主に職員が中心で行っている。年数回は地域の方にもお声掛けし、参加できる方には参加していただいている。

委員：以前園庭緑化の話が出た際は、老人会で水やりや管理を行う代わりに、幼稚園のグラウンドを借りる等の話が出ていたと思う。より密に地域と連携した方がよいと思う。

事務局：地域の老人会との連携ができていないのが実情であり、今後検討したい。

副部会長：子育て世代は、共働きの中で地域の役割を担うのは難しい現状もある。一方で、シルバー人材センターには、働きたい高齢者が多くいる。

部会長：世代間交流の話でいうと、幼稚園単位だと難しいが小学校区単位で取り組んでいる近隣自治体もあり、社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカーを巻き込むことで進むのではないかと。

委員：保育補助の仕事をしているが、保育士の給与は働き手からも少ないとの声をよく聞くが、市から給与に対する補助はされているのか。

事務局：保育士と労働環境について話をすると、賃金の話も出ているが、市が直接給与等について支援することは難しいため、働きやすい環境づくりについて支援をしていく。

部会長：保育士を確保するために、呼び込むような施策を打ち出しているか。

事務局：就職準備金や宿舍借り上げ等について、取り組みを始めている。

委員：院内で保育園を運営している。病院が委託料を支払っているが、赤字が現状である。職員が働く環境整備として行っているが、保育園の経営は非常に厳しいところがあるのかと思う。利用者が利用しやすい環境で保育園が営業をできるための環境整備は必要かと思う。

委員：これまでの話を聞いていると、厳しい労働環境で働いていると感じた。コミュニティを絡めて地域課題を解決できるような仕組みができたらいいと思った。園庭緑化で芝生を植えるのであれば、野草のメヒシバなどの活用をつけば、手間もかからず地域に関わりやすくなると思う。

委員：関連計画として、第5次三田市障害者福祉基本計画も記載するべきだと思う。

事務局：関係部局に確認し記載内容について検討する。

部会長：幼稚園から小学校に上がるうえで、今後10年間、三田市でどのような子どもに育ててほしいかという点を考えていく必要がある。

委員：徳島のフリースクールに取材に行ったことがあるが、環境整備というより職員の児童への関わり方が良く、職員の質が重要だと感じた。自然の中で育つ、自然体験教育はどのような取り組みをしているのか。

事務局：三田市は自然豊かな場所だが、教育の中でも意図的に自然に関わることに取り組んでいる。

副部会長：食材、給食に地産地消の食材を提供している会社もある。食育の提供の場というのもあり

得るのではないか。また、余裕教室の利用が注目されている。品川区、岸和田市では余裕教室で保育を行っているところもある。三田市でも余裕教室の有効活用について記載があるので、同じ施設で幼児や小学生をみる環境ができて良いのではないか。

委員：幼い頃、外国人や障害者の友達が周りに多かった環境で育った。その経験から、子どもから差別が生まれるのではなくて、親から子どもに差別意識が移るので地域ぐるみで子どもに関わっていくことが大切だと思う。また、自然環境が豊かな場所でありながら、自然を使って学ぶ機会が少なく、子どもが自然、虫等に苦手意識があったりするので、自然体験プログラムをして欲しいと思う。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

①保育士の離職率を低くするためには、私立保育園のサービス残業などの働き方の見直し、子どもと接することでの精神的なストレスの軽減をすることが必要である。また、市立幼稚園の芝生の管理については、地域を巻き込むことでコミュニティも活性化し、地域の居場所として園を解放することができると思う。

②保育士の処遇改善については、今後拡充していくことが必要である。

③自然、里山、農業等をキーワードにしながら育てることは、三田の特性につながる。自然が豊かだが、実際に子どもが自然に触れる具体的な仕掛けづくりが必要である。

④保育と教育をつなげることができると思うので、余裕教室の利活用の一つとして保育を行うことを検討してはどうか。

(2) 子ども・子育ての安心（子ども・未来部子ども未来室）

<横溝子ども未来室長から資料に基づき説明>

<意見交換>

委員：「子育てするならゼツタイ三田！」といったスローガンあった。10年ほど前から聞かなくなったが、理由はあるのか、また、多世代交流館「ふらっと」は現在どの程度利用されているのか聞きたい。最後に、乳幼児等・こども医療費助成制度が改正され、一部負担金が導入されたが、それによりコンビニ受診はどのくらい減ったのか、またその財源で他の取り組みがされているのか。また、高校生への医療費助成をすることのだが、分かりやすく広報して欲しい。

事務局：少子化も進む中で、新しく「子ども・子育て応援のまち三田」を掲げて、時代にあった子育て支援を行っている状況である。多世代交流館「ふらっと」については、就園前の2歳前の子どもの利用が増えている。高校生への医療費助成については、高校生への支援が弱いとわかったので、取り組みを始めた。

事務局：医療費や高校生の医療助成制度に関しては、現状を調べ議事録で報告させていただく。

回答) 国保医療課

①負担が400円から800円に変わったことによりどれだけ安易な受診が減ったか。

制度改正前である平成29年度と、一部負担金を400円へ引き上げた改正制度施行後の令和元年度の数値を比較しますと、助成件数は約2万2千件(約10%)の減、助成額は、約9千万円(約19%)の減となっています。これらが安易な受診であるとの断定はできませんが、この助成件数減約10%が制度改正による減少率です。

さらに、一部負担金を400円へ引き上げを行った平成30年度の数値と、所得制限以上者の一部負担金を800円へと引き上げた令和2年度の数値を比較しますと、助成件数は約6万7千件(約32%)の減、助成額

約1億3千万円(約 32%)の減となっていますが、令和2年度については、新型コロナウイルス感染症に伴う外出制限・受診控えの影響が大きいと、制度改正に伴う影響がどの程度あったかの分析は難しいと考えております。

年度	H29 決算	⇒H30.7 月～ 小中学生通院 400 円		⇒R2.7 月～ 所得制限以上 800 円	
		H30 決算	R1 決算	R2 決算	R3 予算
受給者数(各年度末):人	15,808	15,714	15,457	15,118	-
助成件数:件	220,349	208,621	197,870	142,015	195,860
市県助成総額:千円	469,239	424,593	381,247	290,816	381,901

②負担が上がったことにより浮いた財源はどう活用されているか。

削減した扶助費は一般財源であり、財政上用途を特定したものではないため、生まれた財源の活用事例の特定は難しいですが、医療費助成制度の改正後、特に注力したのは教育環境と子育て支援の中身を充実する施策への転換でした。この間、例えば、神戸、阪神間の都市の中で設置が遅れていた念願の中学校のエアコンの設置、さらには、幼稚園・小学校の教室のエアコンの設置など、大事な子どもたちの命を守るための費用を支出してまいりました。また、幼児教育・保育無償化をはじめ、三田版ネウボラなど相談機能の強化など、総合的にきめ細やかな子育て支援・教育のより一層の充実に力を入れ取り組んできております。

③高校生の受診について広報をわかりやすくしてほしい。

広報7月号への掲載に加え、市 HP へも掲載してまいります。また、市内及び近隣医療機関等への依頼によりポスターを掲示していただく予定です。さらに、助成対象となる市民には、9月ごろ、直接文書にてお知らせを送付する予定としており、対象となる市民に正しく情報が届くよう手立てを講じてまいります。

事務局：子育て交流ひろばとして4拠点で整備を進めている。

委員：ネウボラについてお聞きしたい。現在4拠点あるとのことだが、それぞれの管轄で出生数を把握しているのか。

事務局：ネウボラ（三田市子育て世代包括支援センター）は2か所である。子育てに関する総合窓口として取り組んでいる。

委員：平日だけでなく休日も対応しているのか。対応しているのは市の職員か。

事務局：保健師、助産師の市職員が平日9時から17時半で対応している。

委員：子育て支援に関しては、こちらから出向くことも大事かと思うが、出張サービス等はあるのか。

事務局：今後、ネウボラ拠点を4か所にする予定だが、市内全てを網羅できるわけではないので、出張相談を実施している。ただ今年はコロナの影響もあり、思うように稼働できていないのが現状である。

委員：支援が必要な人がいても相談に来ないという現状もあると思うが、支援が必要な人を見つけて、市から向かうことも大事である。ネウボラ拠点拡大も含めて、人員の増員が必要になると思うが、保健職員、医療職員の確保は進めていくのか。

事務局：専任の保健専門職の配置を進めていくが、コロナ禍の影響もあり採用が厳しい状況下、保育の専門相談員を現場に配置している状況である。

副部会長：定期接種の実施率は指標に入れても良いと思う。

部会長：ネウボラの名称は、市民も認知しているのか。ネウボラの認知度はどうなのか。

事務局：愛称であるチャッピーサポートセンターの認知度は30%となっている。

委員：あらゆる子どもに関する問題は、経済的な背景が大きいと思う。地域の中でコミュニティを活性化することが安心安全につながると思う。働く場も三田にないと、地域のコミュニティに参加できないのではないかと。三田は薬草のカフェがあったりするが、三田ならではの仕事の場を作っていく、つかみにくい地域のニーズをしっかりとらえることが大事だと思う。

委員：虐待防止について、本人がどれだけSOSを出せるか。ひとり親家庭支援として、社会福祉協議会では、「さっちゃんのまごころお福分けネットワーク」として取り組んでいる。物資を届けるだけでなく、困りごとについてもヒアリングを行い相談も受けているが、このような取り組みが広がっていくことで、SOSを見つけていくことができると思う。

委員：予防接種については、子育てには多様な考えがあり、予防接種を受けさせたくない人もいると思う。

部会長：母子手帳について、三田市は紙ベースの発行でICTは活用していないのか。

事務局：「SUNだっこアプリ」を導入しているが、検診についてもアプリの活用等検討していないといけないと考えている。

事務局：「SUNだっこアプリ」は、母子手帳のような内容を自分で管理できるサービスも提供している。定期接種については、接種勧奨の時期を工夫して接種率向上を図るなどの取組みを行っている。また、全く未受診の場合は保健師が状況を把握するようにしている。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①ネウボラは、支援が必要な人がいても相談に来ないこともあり得るので、支援が必要な人を見つけ、出張サービスを活用するなど、市から出向くことも大事である。
- ②児童虐待防止は、SOSをいかにキャッチしていくかが重要である。経済的な背景が大きいと考えられるので、地域コミュニティの活性化により地域で見守っていく、支援していくなど、地域ぐるみの取り組みが大事だと思う。
- ③ひとり親支援は、社会福祉協議会でも取り組みを進めており、いかにして通常の支援+αの声を拾っていくかが重要である。
- ④成果指標に定期接種の実施率を加えてはどうか。

(3) 地域ぐるみの子育て（子ども・未来部子ども未来室）

<横溝子ども未来室長から資料に基づき説明>

<意見交換>

委員：少し前の話だが、「多世代交流館ふらっと」周辺で泥酔した高齢者が子どもに近寄っていたとの話もあったので、安心して過ごせる居場所づくりを進めて欲しい。

委員：子ども食堂に行くと、家が貧しいと思われるので行きづらいといった声も聞く。食事の作り手も無償ボランティアになっている。子ども食堂で郷土学習や料理体験教室等を行けば、ボランティアの負担も軽減され、食事提供だけではなくるので、子ども食堂の印象変わるのではないかと。

副部会長：大田区では、子ども食堂は子どものためのものだけではないとしている、憩いの場として地域の方が利用している。

事務局：三田市の場合も、多世代交流の場となっていると考えている。

部会長：子ども食堂を単に子どものためではなく、地域共生や孤食を防ぐための場所といった考え方もできているということだった。

委員：健康をテーマにした考え方が重要ではないか。地域での関わりを増やしてコミュニティを活性化していくので、地域をいかに巻き込んでいくかが重要だと思う。

委員：三田が目指したい状況について、音楽は洋楽を学ぶことが多いので、和の文化も取り入れてはどうか。

事務局：一定の時間、和楽器に触れる時間は設けているが、決められた時間数の中でということもある。ただ和文化の体験を取り入れるのも良いかと思う。

委員：最近、市内の野外活動施設へ行き、小学生と水遊びをした。三田市では自然を活かして、外で触れ合う機会を作りやすい環境にあると思うので、自然を活かした子育てや学習を推進していくと良いのではないか。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

①多世代交流の場として、子ども食堂を使う等、多様な展開をしていけば今後より利用してもらえるのではないか。

②孤食は、子どもに限ることではなくすべての世代に関わる問題である。三田の地域特性や健康を視点として考えるとすれば、地域をいかに巻き込んでいくかが重要である。

③和の体験を学校で進めて欲しい。

④地域コミュニティについて、三田は自然を活かして、外で触れ合う機会を作りやすい環境にあると思うので、コロナ禍ではあるが自然を活かした交流を進めていくと良い。

事務局：補足だが、子ども食堂は、運営者の方が自分たちなりの課題意識をもとに「子どもの居場所」の一形態として開設されており、貧困家庭の子どもが来る場として開設しているわけではない。子どもについても、クッキングや手伝いを通して役割を与えるなど運営については工夫されている。

(4) 学校教育の充実（学校教育部）

<外岡学校教育部次長から資料に基づき説明>

<意見交換>

委員：行政の取り組み「健やかな体の育成」について、オーガニック給食を進めていってはどうか。給食だよりを見たが、学校長と保護者が選定するとあった。具体的にはどのようなプロセスで決定しているのか。またオーガニック給食の導入を検討しているのか。

事務局：学校用給食物資選定委員会で決めている。入札で選ばれた業者から、安定的に供給される食材を優先して使っている。コストも念頭に安全安心な食材を選んでいる。

委員：全てオーガニックにするのは難しいと思うが、収穫体験等でオーガニック野菜に触れる機会があっても良いのではないか。オーガニックの積極利用といった文言を入れて頂きたい。

部会長：三田市の学校給食のPRポイントはありますか。

事務局：三田市内の食材を3割使っている。三田米どんとこいも使用する等、地産地消を進めている。

委員：地域の健康のため、幼いころからオーガニックに触れるのは良いことだと思う。近年はオーガニック食材の摂取が免疫力の向上につながると言われている。地産地消、オーガニックのものを増やすことが大切だと思う。

委員：ICT環境について、タブレット端末の支給等、学生支援に力を入れてもらっている。保護者へのICTの配慮はしておられるのか。小学校は、登下校ミマモルメを活用し学校からメールが来る。欠席連絡を登下校ミマモルメのように保護者と連絡先が紐づき、親がメールで欠席連

絡をできるようなことができないか。

各学校で、色々とプリントをもらってきているが、資料のデジタル化等されてはいると思うが保護者の目に届かないこともあると思う。例えば、学生に教えたこと等を保護者にも伝えてもらえるとうありがたい。

事務局：ツールの活用を各学校でやっている。電子データ化をしたお知らせも大切だと思う。学校のホームページでも配布プリントについて公開しているが、スマホでは見にくい場合など様々な課題があるので、今後検討していきたい。

副会長：登下校ミマモルメは、連絡手段としても活用されている。三田市のあらゆる人が使えるようなICTサービスがあれば良いかと思う。

部長：ICT活用、ペーパーレスということで、今後は少し紙を減らしても良いのではないかと。教師の印刷等の負担を減らすこともできる。

委員：テストでわかる学力と語学力だけでなく、論理的に物事を考えて、相手と議論する力を小学生から身につけないと、グローバルな人材にはならないと思う。

郷土愛の向上に向けて、まちのことを知らないといけませんが、何か郷土学習の教材はあるのか。

事務局：ふるさと学習として、小学3年生の社会科では副読本「わたしたちのまち三田」で学習をしている。子どもたちの学力について、新しい学習指導要領では、資質・能力と表現されており、生涯にわたって生きて働く力を育成していきたい。

委員：子どもたちと運動を通じて学習してもらえるように取り組んでいるが、まだ模索中であり今後も取り組んでいきたい。

委員：学校再編に関して、ある地域の方から、中学校の再編は、社会の入口であり多人数で学習することが大事と思うのでやむないが、小学校は地域にとって様々な拠点となる施設であり、認めがたいという話を聞いた。

部長：小学校は地域の核となる施設であり、地域の再編につながるので、慎重な検討が求められると思う。

委員：故郷を愛する心はとても大事だと思う。大学と地域の結びつきも重要だが、地域の子どもが地域のことを知って地域に残るような取り組みが大事だと思う。

委員：子どもが主役、地域で育てることが大事である。コミュニケーション力をつける、地域と交流を持つ、生きる力を身につけるうえで重要ではないか。日本の文化をきちんと知ったうえで、語学が話せるようになると良いと思う。

部長：意見を整理すると概ね次のとおり。

①健やかな体の育成のためには、オーガニック給食を取り入れてはどうか。幼い頃から確かな味を知ることが大事で生きる力や地域を知ることにつながる。

②保護者への配布プリントの電子化等さらなるICTの活用、ペーパーレス化に取り組んで欲しい。

③学習については、認知能力だけでなく非認知能力も大事ではないか。ふるさと学習はいかに教育に落とし込んでいくかということが必要である。

④学校再編について、小学校再編と中学校再編では意味合いが変わるので、小学校再編については慎重に検討する必要がある。

⑤今後の10年は学習指導要領が変わった中での10年となるので、その視点も持ちながら進めてもらいたい。

2 その他

- ・ 総合戦略部会

8月18日（水）18：30～20：30

- ・ 第4回全体会

9月29日（水）18：30～20：30